

潟

語

り十三

文・小西一三  
絵・小西由紀子

## 潟船造り その②

カラフトでは海の船をこしえでいだ。一生けん命に働く優秀な船大工だと御上から賞状ももらつたども、終戦になつてまた天王に帰つてきただわげだ。

御山の官木は、ますます手に入りにくくなつていだな。

官木が手に入った頃はな、男鹿の山で倒した木を北浦まで下ろし、そこでイカダに組んで船で船越まで引っぱつて来たもんだ。当時、船越には木挽きが五人もいでの。俺も木挽きに頼んでいだども、どうしても木挽きの都合がつがね時に自分で挽いだごどがある。あれは難しいし、大した疲れもあるもんだ。木挽きの仕事というのは実に大変だと思つたな。

## 後半は、ほとんどプラスチックの船

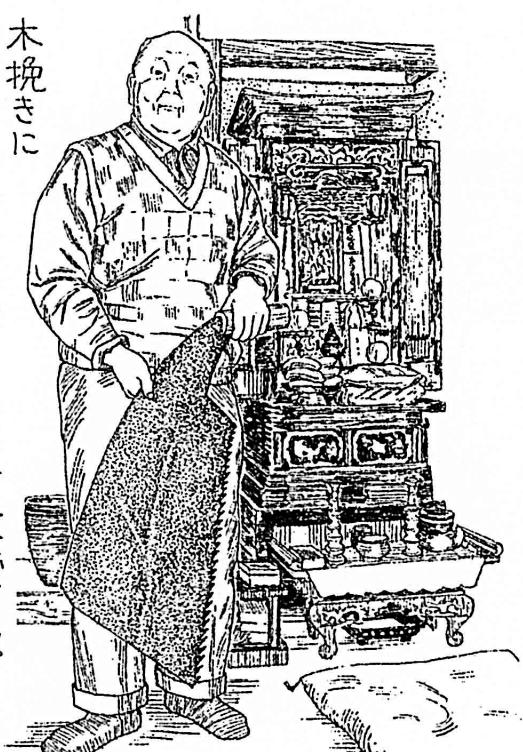
戦後しばらくするとプラスチックの船を造るところがでてきた。官木が手に入らぬので、俺は他県の工場見学に行つてみだ。木の船に比べればペラペラに薄い。こんたのすぐばつこれるべ、と言つたら、工場の人がハンマーを渡して「おもいつきり、ただいでみれ」って言うんだ。俺はおもいつきり、ぶんぬぐつた。それでも、ばつこれねがつたものな…。考え方改めで、俺もプラスチックの船をこしえでみるごどにしたんだ。

プラスチックの船は軽いがら速度は出だ。木の船は重い

がら速度は出ねども安定性はある。言つちや悪いども、プラスチックの船をこしえるのは木の船よりずっと簡単だ。ベニヤで型こしえで、プラスチックをガンガン塗れば出来るもの。あればオナゴでも出来る仕事だ。

あの船が流行したころは注文がいつぱあつてな。俺はそれこそ何日も寝ねで仕事をしたもんだ。早く渡せば、それだけ漁師も喜ぶ。俺はよその船大工より仕事は早えがつたし、はじめてやつた。それこそ八郎潟中の漁師が俺の工場さやつて來たもんだ。

俺は職人だとも酒は飲まね、タバコもふがね。悪りごどもしねで、ただただ船をこしえできた。今でもよ、昔船をこしえでやつた漁師がよ、「船大工いだが」つて言いながら家さ来てけることがある。俺のごど覚えでだけで、たずねで來てければ、やっぱりおもしれよな。



木挽きに  
使つたノコギリを持つ伊勢谷敬蔵さん。  
シャキッと伸びた背筋、八十三才には見えない。